

一人一人を大切にする教育 ～「むごい教育」の逸話から～

先日、調べ物をしている時に「むごい教育」という話に出会いました。子供のころ、聞いたことがある話だったので調べてみると、現代の教育・子育てにも通じる話だと思いましたので紹介します。

後に江戸幕府を開いた徳川家康は、愛知県三河地方の小さな豪族の家に生まれました。周囲を有力戦国大名に挟まれており、攻められたらすぐに滅ぼされてしまうような状況でした。そこで、父親は、跡継ぎである家康を、周囲の有力大名に人質として差し出します。

家康を預かった、三河の戦国大名の今川義元は、家来に「家康には『むごい教育』をしろ。」と命令しました。それを聞いた家来は、家康を日が昇る前に起こし、粗末な食べ物しか与えず、昼間は剣術、武術、馬術の練習を、夜は勉強を、毎日強制的に厳しく、くたくたになるまでやらせました。家康は夜に厠（トイレ）で腰を下ろすこともできないほどだったと言います。

しばらくしてから、今川義元は、家来がこうした教育を家康にしているということを聞き、激しく怒ります。驚いた家来は今川義元に「どうすべきだったのか」と尋ねました。義元は次のように答えました。「好きなだけご馳走を与えよ。寝たいと言ったらいくらでも寝かせてやれ。夏は涼しく、冬は暖かくしてやれ。学問が嫌だというなら一切させなくて構わない。」

家来は、最初に指示された「むごい教育」とは正反対のように感じて首をかしげます。すると今川義元は続けてこう言いました。「そのようにすれば、たいていの人間はダメになるからだ。」

このお話をももちろん現代にそのまま当てはめることはできません。「むごい」とは「残酷である、無慈悲である」という意味ですが、もし現代で家来が行ったようなことを行えば、確かに「むごい」ということになるでしょう。しかしこの逸話は、苦しいことや辛いことを乗り越える経験をさせず、大切にしすぎて、結果として甘やかせて育てることは、結果として子供をダメにし「むごい教育」になってしまうということを伝えています。

現代社会はとても短い周期で、周囲にある環境や道具、雰囲気が変化しています。そのような中、「良い教育」「良い子育て」に対する考え方も多様になり、教育の世界に長くいる私自身も、自分の子育ては迷ってばかりです。今川義元の言う「むごい教育」になってしまっている面もあるかもしれないと考えさせられます。

現在は「子供が困っていたら、すぐに助けてあげるべき」「少しでも危ないことは避けさせる」という風潮が強くなっているように感じます。河辺小では、学校経営方針を「向上心とその基盤となる自己肯定感の伸長」とし「個に応じた支援の充実」を柱の一つにするなど、子供一人一人を大切にする教育を進めるよう努めています。が、「子供を大切にする」ことは、何でも手助けをしたり、困難を避けさせたりすることではないということを、この逸話から改めて感じさせられました。

学校は集団で学ぶ場ですので、自身の思い通りにならないことも多くあり、多様な経験を積むことができる場です。時には困ることや失敗すること、他者との行き違いやトラブルなどもあるでしょう。自分の非を認め謝らなくてはならない場面もあるものです。

学校が、子供にこれらの経験を積ませ、試行錯誤し、自分の力で乗り越えていける場であるためには、教職員や保護者などの大人が、子供の成長を信じて見守る姿勢が大切になります。

河辺小は、「むごい教育」ではなく、「子供が力強く成長できる教育」の場となれるよう、ご家庭との信頼関係や連携を強め、今後も「共に子供の成長を支え・見守るパートナー」となれるよう努めていきたいと思えます。